

1. 教育課程特例校としての取組

本特例は、国際バカロレア教育（IB）の初等教育学齢教育プログラムである PYP（Primary Years Programme）で、教科の枠をこえた探究的な学びを实践し、IB 掲げる 10 の学習者像や国際性の育成、学際的な学びによる概念的な理解により深い学びとしていくために、特別な教育課程を編成している。

2. 自己評価と学校関係者評価

自己評価	評価	学校関係者評価
<状況> 全学年で、教科学習は工夫して時数や内容のスリム化をしつつ、「探究」の時間を週6時間設定している。PYP の構成に準じ、教科の枠をこえる大きな 6 つのテーマにより、各学年年間で 6 つの探究単元を設定し、学校全体で 36 の探究単元で、探究プログラムを構成し、教科の枠をこえた探究的な学びの充実を行っている。1 コマ 40 分で、1 日に最大 7 コマの生活時程で取り組んでいる。毎週金曜日の 7 校時は教員で探究打ち合わせの時間として運営している。令和 6 年 1 月に研究発表会を行った。保護者への説明も保護者会毎に児童の姿を通して行っている。 <成果> 本研究の取組を開始してから、文部科学省の全国学力学習状況調査の記述式問題の無回答率が、顕著に減っている。このことは、児童が様々な情報・条件から、自分なりの解を導き出そうとする力が向上している成果としてとらえている。また、同全国学力調査において、算数・国語・理科の調査結果であるが、学力低下は全くみられていない。むしろ、本研究に取り組んでから、結果としては学力調査の成績は、8～10 ポイント向上している結果となっている。また、上述しているが、無回答率が減少している。また、プレゼンテーションの力が向上していると、成果を感じている。教員の感触としても、児童が短絡的な回答や、コピペのような解で満足すること無く、多面的・多角的でグローバルに情報を集めて、それらを関連付けて自分なりに考えを深め、自分なりの納得解を得ようとする姿が増えていると感じている。 <課題と方策> 「探究」学習の単元の構成において、探究の学習と教科学習との関連性をより一層明確にしていく必要がある。どのように教科とのつながりをもたせるかについて、研究の必要性を感じている。また、「探究」としての評価と教科としての評価をどのようにするかも課題となっている。 方策として、校内にある研究推進委員会と教科部会とで連携して協議を行えるように、連携協議会を立ち上げ、IB の PYP 校の探究プログラムについて、より充実をはかるようにしていく。また、他の IB ワールドスクール PYP 認定校とも、連絡を取り合うなどして、他校の探究単元づくりについての調査研究も進めて、参考にすることで、本校の探究単元開発に活かしていくようにしていく。	B	・本校アンケート調査では、児童は「探究」の時間が「とても楽しい」「楽しい」と答えている児童は 98% であり、探究の学習が大好きで、意欲的に取り組んでいると捉えている。 ・同調査で「探究の学びが役に立つか」の問いに対して、「とても役立つ」「役立つ」が、児童も保護者からも、97% を越える高い評価を得ている。 ・教育課程の研究は進んでいて、探究する児童の授業の様子から大変よく分かった。 ・全国学力学習調査の結果もよい状況なので、PYP の研究を自信をもって指導していただきたい。 ・この研究内容が、公立校に還元できることは何かも明らかにし、発信し、貢献できるとよい。